世界の大久保

あるパンデミック時代における グローバル化地域の視覚的報告

Okubo of the World

2021 | 11.20[土] — 11.28[日]

時間 | 11:00 ～ 19:00　**会場** | ときわ座　**料金** | 無料

史 涵 写 真 展

企画・主催 | 小西仁彦　関根美子 [あらばき協働印刷]　**協賛** | 共住懇

住所 | 東京都新宿区高田馬場 1-6-13

交通アクセス
○ JR 山手線、西武新宿線 | 高田馬場駅 早稲田口より徒歩 7 分
○東京メトロ東西線 | 高田馬場駅 7 番出口より徒歩 3 分
○東京メトロ副都心線 | 西早稲田駅 2 番出口より徒歩 10 分

史 涵 写 真 展

はじめに

写真の領域では、
白と黒は、現実の社会の「光」と「影」を反映していることがよくあります。

今回のコロナウイルスの流行により、 マスクの「白」は、「遊離」する秩序となりました。
夜景の「黒」は、人々に共通する「憂鬱」の縮図となりました。
そして、両者の衝突によって生み出される「グレー」は、
いまの都市の落ち着きのなさと焦りを象徴する一種のグローバル的な脈動です。

いまはグローバル化の世界です。人々の生活はより便利になり、人々の移動もさらに滞りなく行われています。
しかし、傲慢と偏見、差別と争いは、私たちの進む道を泥だらけで、でこぼこにさせています。
パンデミックの襲来は、さらに人々の間の心理的な距離を広げました。

今日の主流メディアによって提示されている「世界」は、混乱、非効率、制御不能、窒息を提示していますが、
それと対照的に、大久保地域における「世界」は、混ざり合い、安定、淡然、包容を体現しています。

この地域における「グレー」は、ユニークな多文化空間の力と魅力を形作っています。
このように、大久保は、世界を反映するだけではなく、「超然」と、この世界に立ち現れています。

○ 本展示では、コロナ禍の大久保地域の都市の表情を中心に、
　2020 年 4 月に緊急事態宣言が発令されてから今日までに撮影した写真で構成しています。

“トーク会”

時間：2021 年 11 月 28 日（日）17:00 ～ 19:00
会場：ときわ座
語り手：関根美子、室橋裕和、史涵
司会：小西仁彦

関根 美子
せきね みいこ

1941 年生まれ。（有）あらばき協働印刷代表。1965 年に独立。1980 年から大久保地域で「あらばき協働印刷」を始める。
1995 年、「阪神・淡路大震災」の支援活動に加わったことをきっかけに地域の市民活動に参加し、現在に至る。

室橋 裕和
むろはし ひろかず

1974 年生まれ。週刊誌記者を経てタイに移住。現地発の日本語情報誌に在籍し、10 年に渡りタイ及び周辺国を取材する。帰国後はアジア専門のライター、編集者として活動。「アジアに生きる日本人」「日本に生きるアジア人」をテーマとしている。おもな著書は『ルポ新大久保』（辰巳出版）、『日本の異国』（晶文社）、『おとなの青春旅行』（講談社現代新書）。

史 涵
し かん

Follow me on Instagram → PUNCTUM_XH

1989 年生まれ。2008 年に中国から来日。中央大学文学研究科社会学専攻修士課程修了。中央大学文学研究科社会学専攻博士課程在学中。研究内容は、大阪市西成区玉出地域のコミュニティと生活様式の変容。2016 年から、新宿区内を拠点に活動する「多文化共生のまちづくり」を掲げる市民活動団体「共住懇」に参加。

写真印刷：Sparking art studio　チラシ・デザイン：すし